

## *The Man Born Blind*

にみる「闇と光」の世界

津 島 克 子

C. S. Lewis (1898~1963) は中世期文学の研究者であり、中世の宮廷愛に関する著書に *The Allegory of love: A Study in Medieval Tradition* (1942) がある。又、児童文学の作家としても知られ、代表作には *The Lion, the Witch and the Wardrobe* (1950) を一作目として、*The Last Battle* (1956) を最後にした Narnia Stories (全七巻) があげられる。しかし、何よりも、神学者として宗教的なものを題材にした小説、エッセイなどの作品が数多い。ルイスは神学者といっても専門家であったわけではない。67年間の生涯を閉じるまでその約半生は無神論者であった。1929年ルイス31才前後から神を信じキリスト教へと回心していったのである。

この作品 *The Man Born Blind* は、1920年代後半に書かれたもので、それは無神論から有神論へと移行した時期にあたるのである。

「闇の世界」と「光の世界」を扱ったこの短編の主題はあくまでも「光」を追求することである。聖書において「光」とは神々の象徴であり、神自身でもある。

ここでは、*The Man Born Blind* におけるルイスの「闇と光」の世界をみていきたい。

この作品は大きく三章に分けることができる。第一章は、光 (Light) についての夫婦の会話である。主人公である Robin は、盲目であったが手術を受けることによって視力を得る。しかし、闇の世界から光の世界へ入ったことにより、光に対して不安を抱き疑問をもつ。

“Then where is the light itself? You see, you won't say. Nobody will say. You tell me the light is here and the light is there, and this is the light and that is in the light, and yesterday you told me I was in *your* light, and now you say that light is a bit of yellow wire in a glass bulb hanging from the ceiling. Call that light? Is that what Milton was talking about? What are you crying about? If you don't know what light is, why can't you say so? If the operation has been a failure and I can't see properly after all, tell me. If there's no such thing—if it was all a fairy tale from the beginning—tell me, But for God's sake—”(1)

この Robin の疑問に対して、闇の世界を知らない妻 Mary は Robin が出す問の意味を理解できない。生まれつき視力を得ている人間にとって、「光」について考えることなど無意味であり、意識外のことである。

「光」を識別するのは、人間のもつ五感のうち視覚である。他の聴・嗅・味・触の感覚も重要ではあるが、視覚のしめる力は大きい。Robin にとって、これまで他の感覚を通して理解していたものを、視覚によって知ることはさほど困難なことではない。しかし、すべての物質を照らしているという光だけは理解できないのである。

第二章となる部分は、ある日 Robin は一人で朝食をとる。そこで彼は重大なことに気がつく。彼はためらいながらも、ゆっくりと目を閉じてみる。部屋を横ぎり、点字の本に触れてみる。一字一字文字に触れてみる。目を閉じて指先からすべてを感じとることができる。彼はわざと、目を閉じたまま朝食をとる。視力を得てから始めて、落ち着いた気分で食事ができたことに気付くのである。

長いことその状態に慣れてしまっていた彼は久しぶりの闇の世界に

安らぎを感じているのである。彼にとって光の世界は孤独と不安である。

食後散歩に出た Robin は、以前 Mary と来たことのある採石場に行く。Mary はそこを“view”と呼び、“What a lovely light that is on the hills over there.”<sup>(2)</sup>と言っていた。この言葉を思い出しながら Robin はあることに気が付く。それは、Mary も“light”が何かは、自分以上には知っていないということである。“light”や“view”という言葉の意味も知らず、ただ人の口まねのように使っているに過ぎなかったのだということである。

ここにルイスの厭世的な態度が表われている。物質的な社会を嫌い、精神的な面を重視したルイスである。意味もなく惰性化した言葉の使い方を批判しているのである。

第三章では画家が登場し、Robin は思わぬ形によって光の追求から解放される。

Robin は採石場で画家に出会い、光を求めていることを話す。画家も又、厭世的な人間であった。彼は Robin に光を示す。それは霧が太陽によって晴れ始め、白い金属のような有様で水蒸気が立ち上っていく様であった。それは光を物体として提示するならば、それ以外にはないようなものである。次の瞬間、画家は霧の切れ目から人間が落ちていくような物音を聞くのである。

From beneath a new-made and rapidly vanishing rift in the fog there came up no cry but only a sound so sharp and definite that you would hardly expect it to have been made by the fall of anything so soft as a human body : that, and some rattling of loosened stones,<sup>(3)</sup>

Robin は声もあげず落ちていったのである。

画家の示した光を彼は果して理解したであろうか。仮りに理解したのなら、なぜ死を選んだのであろうか。それが Robin の求めていた「光」であるなら、死を選択する理由はない。逆に理解できぬまま死を選ぶのも不自然である。

やはり画家が示したその瞬間、Robin は五感を超越して光と一体化したのではないだろうか。Robin は光の中にとけこむように吸い込まれていったのである。

画家の示した光は、谷間に映える朝日のしわざであった。しかしその光の根源は何か。Robin の求めたすべてのものを照らす光、それはとりも直さず神である。聖書において光は神の象徴であり、神自身でもある。Robin は視力を得たことによって、物質の世の中に、目に見える形で神を求めることに失敗した。

聖書において「光」は「命」であり、「闇」は「死」である。Robin は闇〈死〉→光〈命〉→闇〈死〉と移行したことになる。

マルコの福音書に、イエスが盲人の目につばきをつけ、両手をあてて治癒させる箇所があり、ヨハネの福音書にも同じ部分がある。この逸話がルイスの着目の一つになっているとも考えられる。又イエスは「私は世の光である。私に従ってくる者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう。」<sup>(4)</sup>そして、「もしあなたがたが盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある。」<sup>(5)</sup>とやっているように、視力を得ることのみが光を得ることにはならない。善そして真実が光なのである。

Robin は盲目のときも、心の目によって社会を見ていたが、目で見た現実の社会には何の真実も見ることができなかった。現実の世界に失望したのである。

ルイスの自叙伝 *Surprised by Joy* においても、彼は罪と悪の満ちてい

る社会を批判している。そして、永遠の幸福を求めることは、神を受け入れることによって困難ではなくなったことを論じている。

「光」と「闇」の葛藤は、「善」と「悪」の葛藤でもある。

Robinは視力を得たことによって、直接的な形で光を把えようと願った。それはいわばこの目で神を見ようとしたのである。旧約聖書の中で<sup>(6)</sup>人々はその目で神を見れば死ぬと考えていた。

Robinの大胆な願望は彼の死を招いたのである。現代社会において我々は決して神を見ることは出来ない。Lewisはそう語っているのではあるまいか。

#### 註

- (1) C. S. Lewis: *The Dark Tower and Other Stories*, (Collins, 1977) *The Man Born Blind* p.100
- (2) *Ibid.*, p.102
- (3) *Ibid.*, p.103
- (4) John 8 : 12
- (5) John 9 : 41
- (6) Exodus 3 : 6

#### 参考文献

- C. S. Lewis: *Surprised by Joy* (1955)  
Harcourt, Brace & World, Inc.  
The Living Bible (1971)  
Tyndale House Publishers, Inc.  
聖書思想事典 (1972) 三省堂